

第7章 ホイアン出土の陶磁器

第1節 ホイアン出土の陶磁器

菊池 誠一

ホイアンの発掘地点から多量の陶磁器類が出土した。とくに、ディン・カムフォー地点の溝状遺構や川跡からの遺物が多い。これらの陶磁器類の生産地は、磁器が中国や日本（肥前）の生産地が中心であり、陶器や土器類はベトナムが中心で、タイや中国製品が若干含まれている。本報告では、各地点別出土遺物の総破片数と生産地別の破片数、ならびに時期別の破片数を把握した。また、ディン・カムフォー地点の遺物に関しては、上記のほかに遺構内の個体別数の把握もこころみた。

遺物の実測はホイアン市でおこない、ディン・カムフォー地点の遺構内から出土した遺物に関しては、別個体と認定できたものは小破片といえど極力実測し、図版に掲載するようにした。また遺構外から出土した遺物やその他の地点の遺物は、生産地別と年代別にわけ、その代表的なものを実測し、図版に掲載した。

本節では、生産地別製品の概要とディン・カムフォー地点の年代別と器種別の組成比をまとめておく。なお、各製品の詳細については、次節以降にのべる。

1 中国製品

ホイアンの各地点から出土した中国製品は、磁器と陶器（施釉陶器と無釉陶器）がある。出土した中国製品の生産年代は、16世紀末以降のものであり、それ以前の陶磁器がない。このことは、この地域の居住開始時期を考えるうえで重要な資料となる。

磁器は江西省の景德鎮窯系と南部の福建・広東窯系（大半が漳州窯系）に分けられる。これらの製品については、観察表に①遺物番号、②生産地、③器種、④外側文様、⑤見込み文様、⑥内側文様、⑦高台内文様、⑧推定生産年代、⑨釉調、⑩焼成、⑪化粧土の有無、⑫付着物、⑬法量、⑭残存状態、⑮備考の順に記載した。また、色絵や釉裏紅、青磁に関しては、図版番号の横に“釉裏紅”、“色絵”、“青磁”と記載した。

景德鎮窯系の磁器製品は、青花（染付とも呼ぶ）が大半をしめ、釉裏紅が若干出土している。器種は碗・鉢・小碗・小杯・皿・瓶がある。素地は精緻で灰白色であり、呉須は青く発色し、文様もシャープに描かれていることが多い。また、高台内や高台脇に整形の際の放射状のケズリ痕がみられるものが多い。出土した資料の生産年代は16世紀末から17世紀前半代のものと17世紀末以降のものが多い。

南部の福建・広東窯系の磁器製品も青花が大半をしめ、色絵や白磁が若干出土している。近年、福建・広東窯系製品の研究もすすみ、ホイアン出土の大半は福

建省の漳州地域で生産されていたことが判明している。器種は碗・鉢・皿・蓋（合子）・クンディ・散蓮華などがある。素地は灰色味を帯びて、全体的に厚手に作られている。また、高台畳付に粗い砂やモミ殻の熔着がみとめられるものが多い。出土した資料の生産年代は、16世紀末から17世紀前半と17世紀末以降のものが多い。生産年代は景德鎮窯系の製品と同じであるが、量的には福建・広東窯系の製品のほうが多く出土している。また、福建省において陶磁器窯跡の発掘調査がすすみ、漳州窯で生産された製品の分別が可能となったため、漳州窯と判明した製品については、観察表にその旨を記載した。

磁器以外に、無釉の焼締陶器や施釉陶器が出土しているが、量的にはたいへん少ない。そのなかで、珍しい例としてディン・カムフォー地点出土の宣興窯のポットがある。また、大形の無釉陶器は胎土から中国製品と考えたが、生産地についてははっきりしないもので、中国製品と限定することはできないかもしれない。

また、出土量はたいへん少ないが、南部で生産されたと考えられている安平壺もあり、ここで少しこの問題にふれてみたい。



図85 中国主要古窯跡分布図

安平壺

安平壺とは、台湾の安平周辺で発見された粗製の白磁壺のことであり、生産地は中国南部の可能性が指摘されている。現在までのところ、ベトナムで発見された安平壺は、3遺跡を数え、そのうちの1遺跡は沈没船引き揚げ例である。

3遺跡とも遺跡年代が判明しており、安平壺の年代を考えるうえで好資料である。まず、バーリア・ヴンタウ（Ba Ria-Vung Tau）省コンダオ（Con Dao）群島のホン・コンロンロン（Hon Con Lon Lon、大崑崙島）のイギリス東インド会社跡地である。この会社は1705年に破壊されており、出土安平壺にこの年代があたえられる。安平壺は全体的に厚手の作りである。つぎに、おなじくコンダオのホンカウ（Hon Cau）島沖の沈没船から引き揚げられた安平壺がある。“庚午”（1690年）と干支銘の記された墨が出土しており、引き揚げ遺物（青花・白磁など）に17世紀後半から末年の年代があたえられている。安平壺は厚手の作りである。そして、ディン・カムフォー地点の溝状遺構の下層から出土した安平壺である。下層からの出土のため、17世紀前半代の年代があたえられる。ベトナムで発見された最古の安平壺である。この安平壺は薄手の作りで、小形である。これらの資料は、安平壺の流通や編年を考えるうえで貴重な資料となろう¹⁾。

1) 菊池誠一「ベトナム発見の安平壺」『東国史論』第12号、83-92頁、1990

2 日本製品

日本製品は、17世紀後半に生産された肥前磁器（伊万里焼とも呼ぶ）だけである。器種としては、碗・鉢・皿・蓋・瓶がある。碗では“荒磯文”が多く、皿では“日の字鳳凰文”が多い。素地は福建・広東窯系のそれよりも精緻であり、呉須は青く発色しているものと灰色にくすんだものなどがある。文様表現では、景德鎮窯の製品と比較すると、たとえば龍文や鳳凰文では景德鎮のほうがより写実的であり、肥前のそれは簡略・漫画的になっている。また、高台皿付に小砂が熔着していることが多い。

ホイアン旧市街地の発掘調査のどの地点（チャンフー85番は別）でも肥前磁器は出土しており、17世紀後半には普遍的にこの地域で使用されていたことがわかる。わたしたちは、ホイアン地域の広域分布調査も実施しているが、各地点から肥前磁器が多数表面採集されており、上記のことを裏づけるものと考えている。

また、ディン・カムフォー地点の溝状遺構と川跡から出土した中国磁器と肥前磁器の出土状態の相違から、17世紀後半頃にホイアンで使用されていた食器が中国磁器から肥前磁器へと交替していたことが判明した。この原因は、17世紀中頃に中国の明・清交替期の混乱で窯業地が疲弊したことである。そのため、東南アジア市場を席卷していた中国磁器の輸出量は激変し、その補完として肥前磁器がベトナムや東南アジア市場に運ばれたことを、遺構内の遺物出土状態が雄弁に物語っている。また、ベトナムの視点からみれば、当時の中部ベトナムでは磁器生産がなく、北部ベトナムで磁器生産をしていたものの、その製品が中部にまで流通しなかった。その背景には、北部の鄭氏政権と中部の阮氏（広南阮氏）政権の間で、この時期大規模な戦争を繰り返していたため、両地域の交流がほとんどな

かったことに原因がある。そのため、中部では磁器製品を海外製品に求めざるをえず、肥前磁器が中部の市場に運ばれたのであろう。当時の中部における最大の市場は、ホイアンであった。

3 ベトナム製品

各地点から出土した陶器・土器でもっとも多いのは、ベトナム製品の陶器（無釉焼締陶器・土器）である。また、興味深い資料として陶器製のキセルも出土している。陶器・土器の観察表は、①遺物番号、②生産地、③種類、④分類、⑤文様、⑥胎土色、⑦色調（内面・外面）、⑧胎土、⑨焼成、⑩法量、⑪残存状態、⑫備考、の順に記載した。

ベトナム製品には、施釉陶器がなく無釉の焼締陶器と土器だけである。焼締陶器は中部産と北部産にわけることができ、そのなかで中部産の製品がもっとも多い。北部産の焼締陶器が少ない理由は、前項で指摘したように17世紀の北部と中部の交流がほとんどなかったことによっている。

器種としては、貯蔵具である長胴容器（長胴瓶）や四耳壺、煮炊具である鉢と蓋、食器洗い容器である大鉢、供膳具である浅鉢などがある。長胴瓶や大鉢、浅鉢の素地は砂粒をほとんど含まず精緻であり、ときどき色調の違う粘土による層状（あるいは縞状）を呈している。それに比べて、煮炊具である鉢・蓋は素地に粗い砂粒を多く含んでいるのが特徴である。

詳細については、次節で焼締陶器の分類、生産地、製作技術の問題について触れるため、ここではそれ以外のものについて簡単に紹介する。

陶製キセル

陶製キセルは、ディン・カムフォー地点の遺構内と遺構外を含めて、全部で5点出土している。キセルの年代は、溝状遺構から出土しているため17世紀代である。ホイアン地域では、ほかに広南営跡からも表面採集されており、17世紀代のベトナムにおける喫煙の習慣を知ることができる。このキセルの生産地は、16～17世紀のフエ・ミースェン窯跡で熔着した資料が出土（写真）しているため、ここでの生産が考えられる。

ところで、わが国の喫煙風習は“南蛮”貿易を通じて、東南アジア経由でもたらされた。おそらく慶長年間（1596～1614年）にはじまり、慶長10年にはたばこの耕作もかなり普及していたと考えられている。朱

印船絵馬にはキセルでたばこを吸うひとが描かれ、寛永12年（1635年）の日本からの輸出品のなかに「煙草100斤」とあり、このころには東南アジア市場に日本の煙草が輸出されていた。

ベトナムにおける喫煙の風習はいつからおこなわれていたかわからない。しかし、考古資料からでは、ディン・カムフォー地点出土資料が17世紀代であり、フエ・ミースェン窯跡資料は16～17世紀代になる。



しかし、ベトナム人の喫煙民俗例では、煙草は水煙具（竹製が多い）を使用する。そのため、ホイアン出土のキセルは、その使用住民を考えるうえで貴重な資料となろう。また、わが国のキセルは東南アジア経由でもたらされたといわれている。たとえば、キセルの語源はカンボジア語であり、ラウの語源はラオス語である。その意味でもホイアン出土のキセルのもつ意義は大きい。

土製円盤

ディン・カムフォー地点の17世紀代の溝状遺構や川跡から焼締陶器や土器片を加工した円盤状遺物が出土している。大きさは2.4cmから5cmくらいで、周辺を加工して円形にしているのが特徴である。これは、現在でもベトナム民俗例で見られるような子供の遊戯具、とくに「石ケリ」具に類似している。わが国の江戸時代遺跡からも類似する遺物が出土しており、子供の遊戯具の可能性が考えられている。17世紀のホイアンの子供たちが使用したものと考えてさしつかえないであろう。

4 タイ製品、その他

ディン・カムフォー地点からタイ製品の焼締陶器の底部片とタタキ目のある土器片が出土している。現在のところ、タイ製品はこの2例しかない。タイの焼締陶器は四耳壺の底部であり、この生産地はシンブリ県ノイ川窯系の窯跡で生産されたと考えられる。また、土器はわが国の茶の湯の世界で“ハンネラ建水”とよばれるものであろう。

タイ製品はわずか2例であるが、17世紀のホイアンとタイとの交流をしめす資料としては初めての発見となった。17世紀のタイにはアユタヤに日本町があり、朱印船も寄港している。朱印船がタイを往復するうえで、ベトナム中部のホイアンは中継港としての位置をしめ、またそこには日本町があり、東南アジアに存在する日本人ネットワークの情報収集地としての適所であったのであろう。そうした歴史的背景を今回のタイ製品の発見が語っているようである。

タイ製品以外に、東南アジア産と考えられる施釉陶器が出土している。これらの生産地は、現在のところ不明である。

以上、出土製品の概要をまとめた。つぎに、ディン・カムフォー地点の生産地別組成と時期別、器種別組成をまとめ、ホイアンの食器様相を考えるうえでの基礎資料を提示したい。

5 ディン・カムフォー地点の生産地別組成と器種別組成

ディン・カムフォー地点の第1トレンチの溝状遺構と第2トレンチの溝状遺構（以下、溝跡）は同一の遺構である。17世紀代に掘削された溝から多量の陶磁器が出土しており、17世紀代の食器様相を知るうえで良好な資料となる。そのため、ここでは、出土破片数から個体数を把握して、その生産地別・時期別、そして器種別の組成をあきらかにしたい。まず、個体数の把握については、個体別の認定

方法として底部、文様、口縁部の相違から識別した。

第1トレンチの溝跡から陶磁器が178個体、第2トレンチの溝跡から陶磁器が209個体出土している。これを生産地別比として円グラフにしたのが、図のaとcである。また、磁器だけの個体数を時期別に棒グラフにしたのが、図のbとdである。時期区分に関しては、Ⅰ期を16世紀末から17世紀前半、Ⅱ期を17世紀後半、Ⅲ期を17世紀後半から18世紀前半、Ⅳ期を18世紀後半以降として設定した。

また、参考までに第2トレンチの川跡から出土した陶磁器もしめしておく。出土陶磁器は125個体で、これを生産地別比として円グラフにしたものが図のeである。また磁器だけの個体数を時期別に棒グラフにしたものが図のfである。

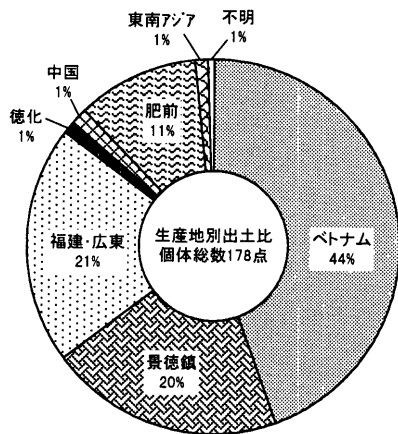
その結果、第1トレンチの溝跡出土陶磁器の生産地別組成比は、ベトナム産(44%)と景德鎮窯系と福建・広東窯系(41%)がその大部分をしめ、肥前磁器は11%である。第2トレンチの溝跡出土陶磁器の生産地別組成比は、ベトナム産(39%)と景德鎮窯系と福建・広東窯系(54%)がやはりその大部分をしめている。しかし、第2トレンチの川跡出土陶磁器では、ベトナム産(41%)と景德鎮窯系と福建・広東窯系(32%)以外に肥前磁器(19%)がその一角をしめている。また、磁器の時期別変遷では、第1トレンチの溝跡ではⅠ期に景德鎮窯系と福建・広東窯系がほぼ同数であるが、第2トレンチの溝跡では福建・広東窯系の製品のほうが多い。川跡でも同様である。しかし、Ⅱ期になると、肥前磁器が多くなり、景德鎮窯系と福建・広東窯系がたいへん少なくなる。Ⅲ期になると肥前磁器はなくなる。また、この時期の製品数が少なくなるのは、遺物の出土状態からもわかるように、肥前磁器が廃棄された時点で溝がほとんど埋まっていたためである。とくに、第2トレンチの溝跡では肥前磁器が少なく、そのかわり川跡で多く出土しており、そのことを証明している。

つぎに、磁器の器種組成とベトナム焼締陶器・土器の器種組成を溝跡出土陶磁器からみてみよう。磁器の器種組成は図のgとhに、ベトナム焼締陶器・土器の器種組成を図のiとjに棒グラフでしめた。

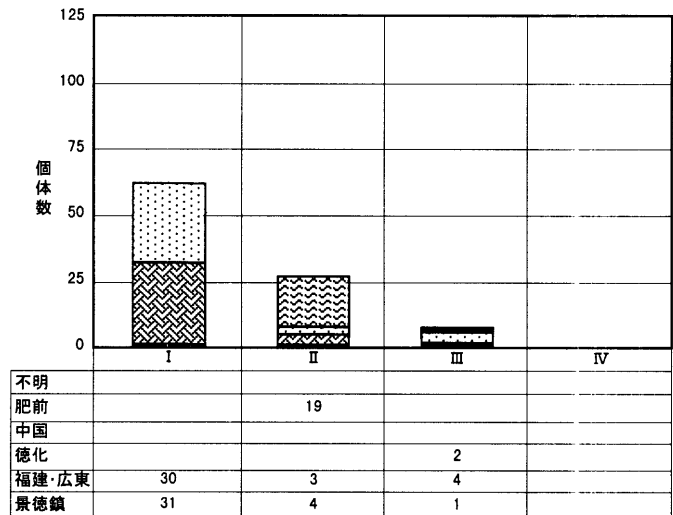
第1トレンチ・第2トレンチの溝跡では、景德鎮窯系と福建・広東窯系とも碗・鉢と皿が多く出土している。ただし、小碗や小杯では景德鎮窯系の製品が多い。肥前磁器においても、碗・鉢と皿が基本であり、その他の器種はたいへん少ないことがわかる。

ベトナム製品については、次節「ベトナム焼締陶器の分類と製作技法」のなかで、分類案と各容器の用途を提示したが、棒グラフはその分類にしたがって器種別に示したものである。溝跡から出土した焼締陶器・土器のなかで、長胴瓶Ⅰ類とⅡ類、鉢Ⅱ類とⅣ類、大形鉢Ⅰ類、浅鉢Ⅰ類、蓋Ⅰ類が主要な器種であることがわかる。長胴瓶Ⅰ類とⅡ類は貯蔵具であり、鉢Ⅱ類とⅣ類は煮炊具、大形鉢Ⅰ類は食器洗い具、浅鉢Ⅰ類は供膳具、蓋Ⅰ類は鉢Ⅱ類・Ⅳ類の容器の蓋である。

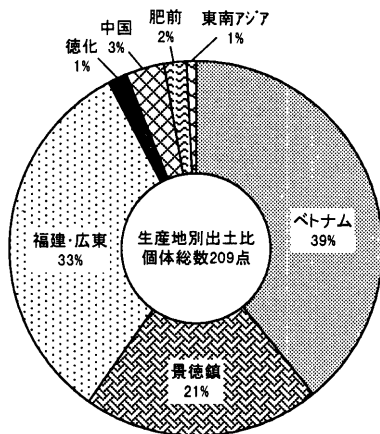
以上のことから、17世紀のホイアンの食器様相を考えると、17世紀前半には供膳具として中国の景德鎮窯系と福建・広東窯系の碗・鉢、皿類が主に使用され、このなかで福建・広東窯系の製品の方が多いことがわかる。これが17世紀後半に



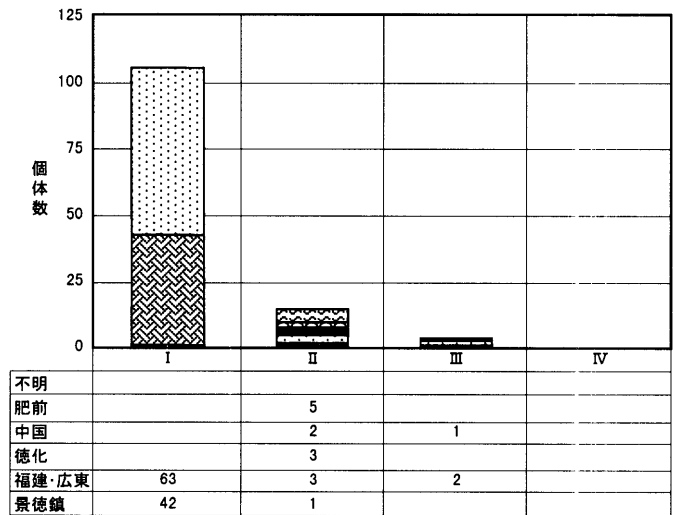
a. 第1トレンチ溝跡



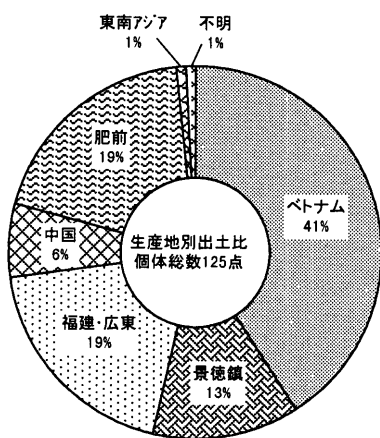
b. 第1トレンチ溝跡時期別個体数（磁器）



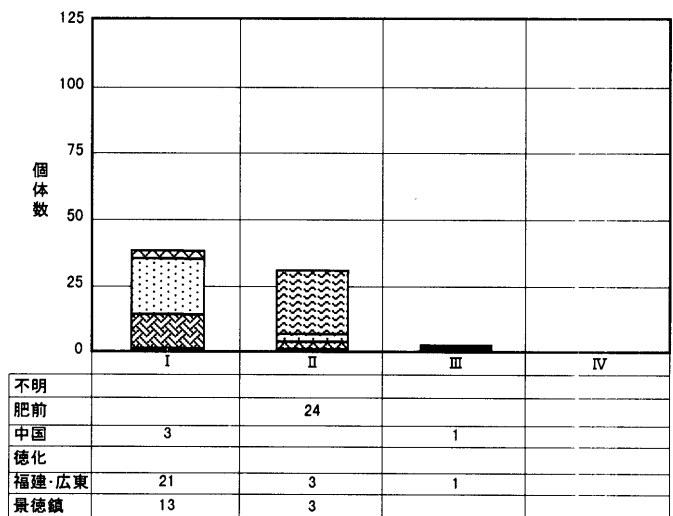
c. 第2トレンチ溝跡



d. 第2トレンチ溝跡時期別個体数（磁器）



e. 第2トレンチ川跡



f. 第2トレンチ川跡時期別個体数（磁器）

図86 ディン・カムフォー地点生産地別・時期別組成

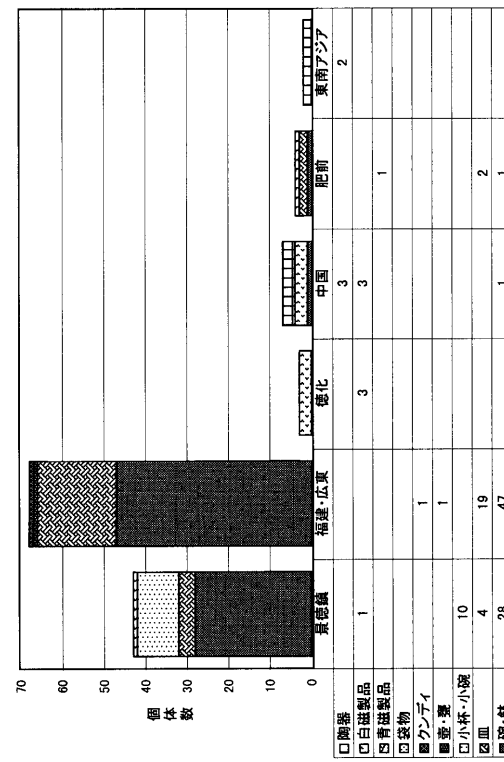
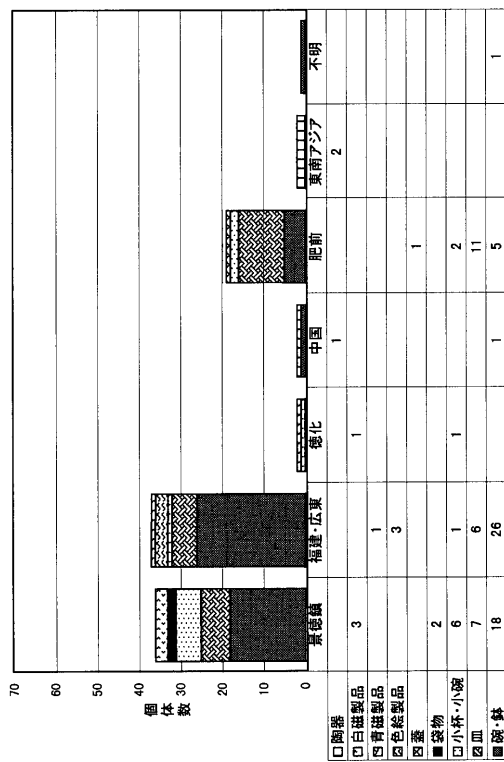
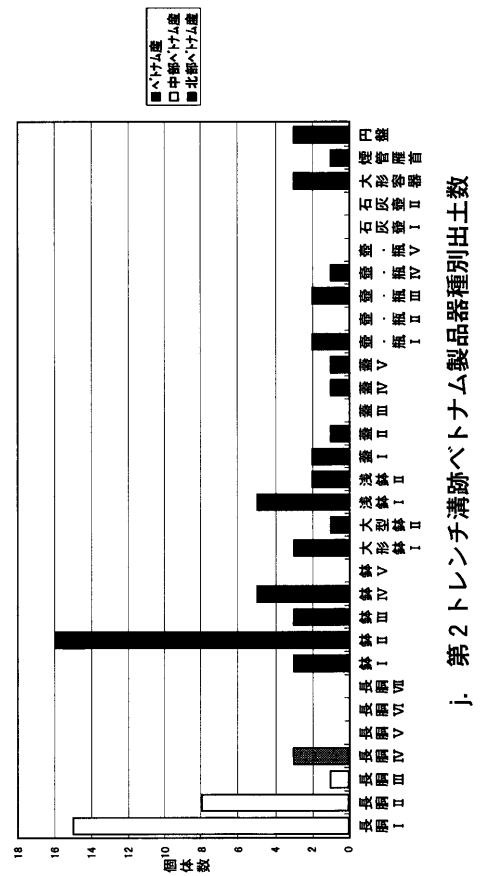
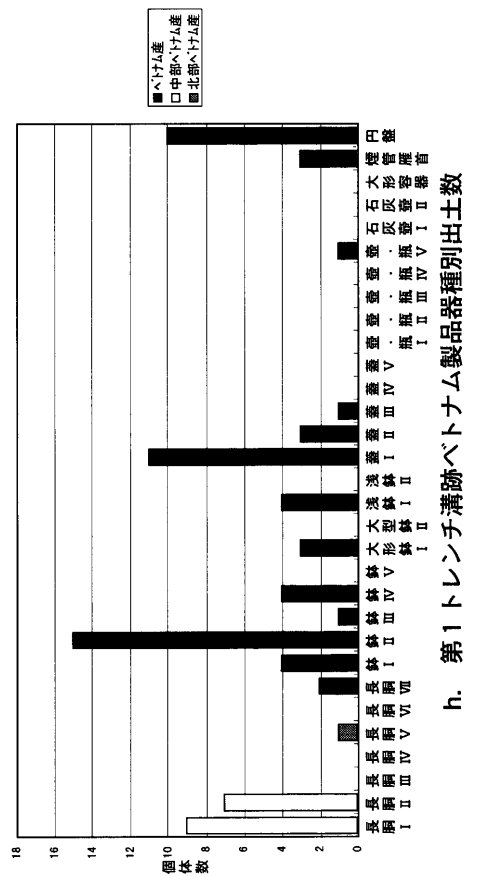


図87 ディン・カムフォー地点生産地・器種別出土数

なると肥前磁器の碗・鉢、皿に置き変わるようになる。そして、貯蔵具や煮炊具、食器洗い具としてベトナム産、それも大半が中部産の焼締陶器と土器が使用されていたことわかる。

17世紀のホイアンでは碗・鉢、皿類に中国や日本の外国製品が使用されていた。この背景には、まず中部地域において青花などの磁器生産がなかったことがあげられる。この時期、北部では青花などの磁器生産をおこなっていたが、中部にまで流通しなかった背景には、北部鄭氏政権と中部阮氏政権の対立・抗争があったためである。

17世紀のホイアンの食器様相の復元は、当時在住していた日本人や中国人の生活様式を考えるうえでもたいせつな課題である。同時代の北部の食器様相や東南アジアの食器様相と比較して、ホイアン地域の特質を深めていくことが今後の課題である。

なお、中国磁器や肥前磁器の諸特徴や製品流通の歴史的背景などについては第4節と第5節の大橋康二氏の報告によりたい。また、ベトナム製品の分類・用途、生産地、そして流通の歴史的背景などについては第2節と第3節の筆者の報告のなかでふれているので参照していただきたい。